

Warum ist das Licht gegeben dem Mühseligen op.74-1

ブラームス:モテット「なぜ、苦しむ人に光があたられるのか」

Brahms 自身がヨブ記をテーマとし、他の聖書のテキストを組み合わせで展開し、最後はコーラルで締めくくった傑作である。4つの部分からなり、1～3曲はカノンの形式(模倣的書法)で統一されている。最終章にコーラルを置き、BachのMotteteの伝統を踏襲した作品である。

1. Warum?



Warum? Warum ist das Licht gegeben dem Mühseligen,
und das Leben den betrübten Herzen?

Warum? Die des Todes warten und kommt nicht,
und grüben ihn wohl aus dem Verborgenen;
die sich fast freuen und sind fröhlich,
daß sie das Grab bekommen.

Warum? Und dem Manne, deß Weg verborgen ist,
und Gott vor ihm den selben bedeckt. Warum?

(Job 3: 20-23)

なぜ、悩む者に光が与えられ、
心の苦しむ者に命が与えられたのか?
どうして死を望む者にそれが来ないのか、
そして死を迎え墓を得ることに喜んで待っている人が、
秘かに死者を葬ることができないのか?
どうして神は道を隠された人間を
同じ様に覆い隠そうとするのか?
(ヨブ記3: 20-23)

いきなり „Warum“ (何故だ?) と二回問い
掛けで始まる。一度目は苦難に耐えて押し
黙っていたヨブの口から、全身全霊で f(強)
く神に嘆願し、二度目は深く思い悩むヨブの
内なる声が、p(弱)く聴こえる。Brahmsは
„Warum ist das Licht gegeben dem
Mühseligen“, ~ (どうして神は悩み苦しむ
者に光を与え~) はソプラノから1声部ず
つ増やしていく。苦しみが増幅され、出口の
見えない苦難の中で、もがいているヨブの
心底を描いている。

2. Lasset uns unser Herz



Lasset uns unser Herz samt
den Händen aufheben
zu Gott im Himmel.
(Klagelieder 3: 41)

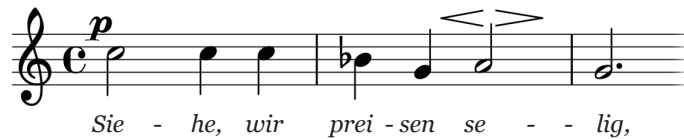
天におられる神に向かって、
心を手と共に高く上げよう
(哀歌3: 41)

メロディーは光ある „Himmel“ (天上) を
仰ぎ見、手を伸ばしながら神を求め上昇し
ている。

Warum ist das Licht gegeben dem Mühseligen op.74-1

ブラームス：モテット「なぜ、苦しむ人に光があたられるのか」

3. Siehe, wir preisen selig



*Siehe, wir preisen selig, die erduldet haben.
Die Geduld Hiob habt ihr gehöret,
und das Ende des Herrn habt ihr gesehen;
denn der Herr ist barmherzig und ein Erbarmer.
(Jakobus 5: 11)*

私達は耐え忍んだ人を幸いであると称賛する。
あなた方はヨブの忍耐を聞いたことがあるだろう。
また主が彼になさったことの結末を見たであろう。

ゆえに主がいかに慈悲深く
あわれみに富んだかたであるかが、
わかるはずである。
(ヤコブの手紙5: 11)

安らぎ満ちた音楽である。苦しみを耐え忍び、試練を通り抜けた先に見えた光明に包まれた響きがある。最後に „Erbarmer“ (神は憐れみ深い方) がこだまの様に響き渡る。

4. Mit Fried' und Freud'



*Mit Fried' und Freud' ich fahr' dahin, in Gottes Willen,
getrost ist mir mein Herz und Sinn, sanft und stille.
Wie Gott mir verheissen hat,
der Tod ist mir Schlaf worden
(Martin Luther)*

安らぎと喜びをもって逝きます。
神の御心の赴くままに、私の心と意識は慰められ、
平安で穏やかです。
神が私に約束して下さったように、
死は私にとって眠りになりました。
(マルティン ルター作)

Luther(ルター)作のコラールに Brahms がハーモニーを付けた。神の身許に行く = 死をテーマとしている。死が „sanft und stille“ (至福に充ちた平安で穏やか) の部分では Brahms のハーモニーは安らぎと浄化の音色で応えている。